

古田史学の会・東海

東海 の 古 代

第112号 平成21(2009)年12月

会 長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

110号に引き続いて、佐藤久男氏の「もう一つの『裸国・黒齒国』」を掲載します。

はじめに

- 1 「裸国・黒齒国」に関する文献
- 2 文献史料の示す「裸国・黒齒国」
- 3 「裸国・黒齒国」の所在地

もう一つの「裸国・黒齒国」(2) —石器時代の遠洋航海者たち—

川崎市 佐藤久男

4 比較言語学の視点から

比較言語学という学問分野がある。その言語分類の中に、インド・ヨーロッパ語族、ウラル・アルタイ語族などと並んで、オーストロネシア語族というのがある。(マライ・ポリネシア語族とも言われる。)

その分布圏は、西はアフリカ東岸のマダガスカル島から、東は南米西海岸沖きのイースター島まで、赤道圏をめぐり、地球の2/3周にまでに及んでいる。

私の探求の対象としたのは、この言語圏のうち東部諸語、即ちメラネシア、ポリネシア、ミクロネシアの諸語群である。

そしてこれら東部諸語は、分岐した時点が非常に新しく、慣れれば容易に意志の疎通が図れるほどコトバが似通っているとされている。

ラピタ人が、パラオやタヒチへ航海して行っても、コトバが通じることは、航海者にとっても非常に心強く、次の航海への意欲をかき立てたのではないだろうか。(図2参照)

5 民族学・民俗学の視点から

南太平洋諸民族(東部オーストロネシア語族)の間には、次のような習俗が広く行われていた。

A 黒齒の風習

後述する。

B 鯨面文身

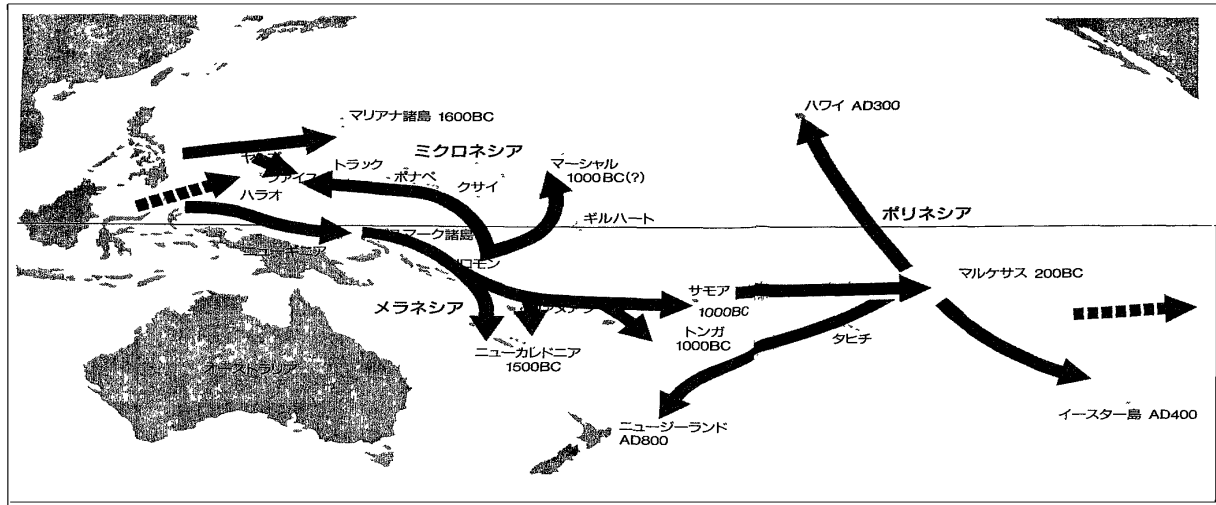
キャプテン・クックを始め太平洋探検家達は、例外なくこの習俗を報告している。

図3 ポリネシア人の入れ墨 (1770年)



図 2

オーストロネシア語を話す集団がオセアニアへ拡散したルート*1



C 母系社会

母の系統の血縁者とともに家族・血縁集団を形成している社会。必ずしも母権（統制権が女性にある。）を意味しない。*2

D 主食はタロイモ・ヤムイモ等である。

タロイモ・ヤムイモ等は、東アジア・東南アジア原産である。また、豊富な海産物が食生活を支えている。

E 三種の神器ならぬ「三種の家畜（イヌ・ブタ・ニワトリ）」が、主として食用として飼われていた。

これらも中国東南部・東南アジアが原産である。

F 「二倍年暦」

これはパラオだけの孤立した現象ではなく、南太平洋各地で行われた広域的現象ではないかと私は考えている。（日本列島及び朝鮮半島南半は、その北端に位置しているのではないだろうか。）

コトバ・習俗のどれをみても、南太平洋の人々は中国東南部・東南アジアとの間に、密接な関係が認められる。

次に個別の議論に入ることとする。

5-1 「黒歯」の習俗について

東南アジアや南太平洋諸島に広く栽培されているヤシ科の常緑高木（高さ10～25m）檳榔樹がある。果実の檳榔子は鶏卵大で、キンマの葉に包んで噛み、嗜好品とする。軽い精神的鎮静と芳香の漂いが得られる。（俗にいうハッカの類である。）

このビンロウジを噛む習慣は、上記諸地域に広く広がっており、噛み続けると歯が朱紅色になり、やがて歯は黒くなる。

黒歯国の「黒歯」とは、このビンロウジを噛むことにより黒くなった歯を指しているのであろう。（なお、江戸時代まで日本で行われていた「お歯黒」は、ミクロネシア西部の島々（サイパン・ヤップ・パラオ島）でも最近まで行われていたことが報告されている。*3

5-2 「裸国」について

南太平洋に住む人々を「裸（人）国」と表現することについて、違和感を持つ人はいないであろう。

彼らの日常生活はほとんど裸で過ごしているし、伝統的な礼装においても、男女とも上半身は「裸」である。（下半身は腰みの）

*1 朝日選書523『モンゴロイドの道』（「科学朝日」編、1995年3月発行）122・123頁から転記

*2 『世界の名著』59のマリノスキー著「西太平洋の遠洋航海者」、（1967年、中央公論社。原著は1922年）始め参考文献「10～13」参照。

*3 印東道子著『オセアニア暮らしの考古学』（2002年11月、朝日新聞社）、211頁

なお、「ビンロウジで赤黒くなった歯と、お歯黒で黒光りした（青黒くなった）歯の両方の歯がミクロネシアで出土しているが、両者は区別して鑑定されている。」という。

これを傍証するものに「こうやの宮」の五神体の一つ「南方からの使者像」がある。彼の正装している姿もやはり上半身「裸」で、下半身は腰みのである。

※ 昨年「こうやの宮」を訪ねたとき、同行の人から「歯は白いね。」と指摘された。現地の方に保存についてお伺いしたところ、「50年に一度色を塗り直している。」とのことであった。千数百年色を塗り直している間に、あるいは黒く塗ることを失念され、白くなったかも知れないなどと思ったものでした。*1

6 石器時代の遠洋航海者たち

ー人類の太平洋島嶼部への移住拡散ー

それでは南太平洋の人々は、いつ、どのような経路をたどって、これら広範囲な地域に移住・拡散したのであろうか。

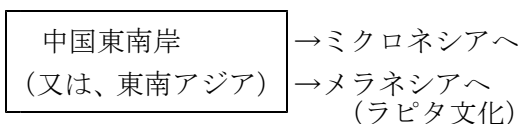
人類学の成果を簡単に復習しておこう。

人類発展の長い歴史（約700万年）からみれば、太平洋の島々に人類が住むようになったのは、近々5～4000年前頃からに過ぎない。

（前掲図参照）

6-1 移住の第一段階

（5～4000年前から）



移住の第一段階は、5～4000年前頃中国東南岸（又は、東南アジア）から台湾・フィリピンを経て、ミクロネシア・メラネシアへ進出することから始まる。

ミクロネシアに進出した人々は、グアム・サイパン・パラオへ、そしてメラネシアに進出した人々はニューギニア北部の島々に定着し、あの有名な「ラピタ文化」を開化させた。（BC1300～）

6-2 移住の第二段階（BC300年頃～）

〔ラピタ遺跡群→タヒチ島周辺〕

ーBC300～AD300ー

ラピタ遺跡群へは、1,000年近く留まり、その東方への進出はようやくBC300年頃になったからであった。そしてタヒチ周辺の島々への移住は、AD300年頃にはすべて完了する。

6-3 移住の第三段階

移住の第三段階は、タヒチ周辺から次の諸地域への移住となる。

AD5世紀頃 : ハワイ諸島

〃 : イースター島

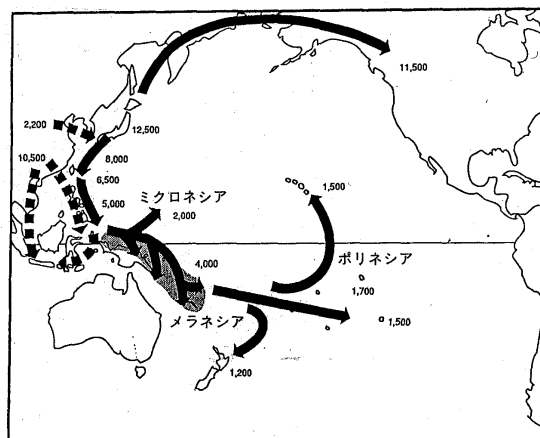
AD9～10世紀 : ニューゼーランド

ここに太平洋の島々への移住・拡散は完了する。（但し、論者によって年代は多少前後する。）

いずれにしても太平洋の島々では、現在無人島になっている島でも、一度は人々が住んだ痕跡の残っていない島はないといわれている。石器時代にどのように人々が移動したのか、この地域にはいまだに謎が多い。

図4 ブレイブスの

「縄文人コネクション仮説」を示す図*2



なお、これに関連して、興味深い新聞記事を見つけたので紹介する。

① 2009年1月27日（火）、朝日新聞（夕

*1 「こうやの宮」（福岡県みやま市瀬高町所在）

古田武彦著『古代史60の証言ー九州の真実』ー金印から吉野ヶ里までー（1991年2月、かたりべ文庫）で詳しく紹介されている。

*2 片山一道著『ポリネシア人ー石器時代の遠洋航海者たち』（1991年11月、同胞舎出版）258頁から転記

刊)の記事には、

「ピロリ菌は人間の胃に寄生し、胃ガン・胃カイヨウの原因と考えられている。そのピロリ菌の遺伝子解析から、南太平洋への人類進出のルート・ルートが解明された。」とあり、その結論は次のようである。

(メラネシア人・ポリネシア人は)「約5000年前ユーラシア大陸から台湾を経て大海原に出、フィリピンを経由して、南太平洋の島々に移り住んだ。」

更に、比較言語学による同地域の400種の言語の解析からも、同様の結論が得られた。

と述べている。

この両解析の結果は、先にあげたホームランド＝「中国東南岸」説をはからずも補強しているようで、大変興味が深い。*1

ることにも注目したい。

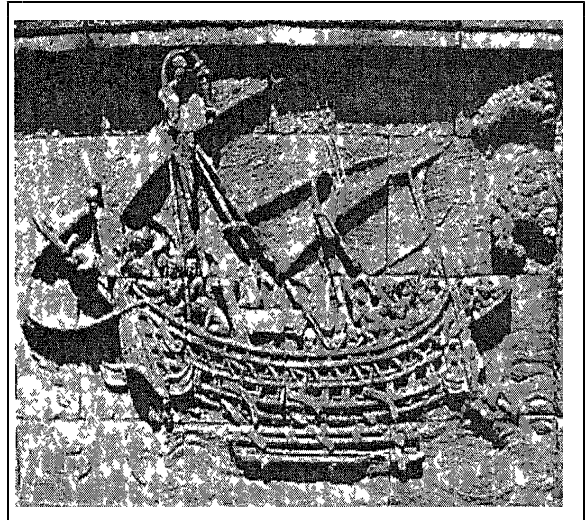
7 遠洋航海のノウハウ*2

ーハードウェアとソフトウェアー

7-1 アウトリガー・カヌー

ハードウェアには二種類あった。アウトリガー・カヌーとダブル・カヌーである。

図5 アウト・リガー付き大型構造船*3



インドネシア・ジャワ島のボロブドール寺院の壁面に刻まれたアウト・リガー付きの大型構造船(西村真次著『南方民族誌』東京堂刊より)

アウトリガー・カヌーは、文字通りアウトリガーを付け、マストを支柱に三角帆を張り、風を受けて帆走する。

キャプテン・クック等の探検記によれば、その帆走スピードは17・8世紀の西洋帆船に引けをとらなかつたらしい。

7-2 ダブル・カヌー

これは、カヌーの船体を二つに並べて、間に甲板を張ったもので、カタマランともいう。

ラピタ遺跡より東の遠洋航海ではもっぱらダブル・カヌーが使われ、長距離・ノンストップ

大陸・台湾・南太平洋 人類進出の道見えた
「ピロリ菌」「言語」解析で

ワシントン州勝田敏彦 人類は約5千年前、ユーラシア大陸から台湾を経て南太平洋の島々に移り住んだらしいことが人の胃に寄生し、胃がんなどの原因と考えられているピロリ菌の遺伝子解析から、南太平洋の4000の言語の解析という異なる方法で判明した。両方の論文が米科学誌サイエンス最新号に同時掲載された。

ピロリ菌遺伝子の解析からわかる人類の南太平洋への進出ルート(米サイエンス誌から)

約5千年前、台湾から海を渡ってメラネシアなどへ

約3万7千～3万1千年前、海面低下で陸続きになった島々をつたってニューギニアやオーストラリアへ

ピロリ菌の遺伝子の解析をしたのはマックスプランク研究所などの国際グループ。台湾やオーストラリア、ポリネシアなどの原住民の胃の粘膜や胃液からピロリ菌を分離、培養してその遺伝子の変異を調べた。

地域的に離れている生物集団では長い間に遺伝的な変化が出てくる。その生物の遺伝子の変異の程度や分布から集団がいつごろ分かれたかを推定できる。ピロリ菌の遺伝子は人間の進歩より変異が速い。人間の進歩の解析ではほとんど差が出ない比較の最近の集団の違いも、胃に寄生したピロリ菌の変異であったとを明らかにした。

その結果、約5千年前、台湾から大海原に出て、フィリピンを経てニューギニアやポリネシアなどに渡った人たちがいたことがわかった。また、約3万7千～約3万1千年前にも、氷河期の海面低下で陸続きになった島々をたどってニューギニア、オーストラリア、ポリネシアへと渡った先行グループがあったこともわかった。

一方、ニューギニア、オーストラリア、南太平洋の諸島の諸島の解析から、やはり約5千年前、台湾ルートによる移住があったとを明らかにした。

② 2009年3月23日(月)、朝日新聞(朝刊)の記事には、

「園田・田島コレクション」HLTVウイルス分析では、中南米先住民とモンゴロイドとの関連のみが注目を集めているが、メラネシア・ポリネシアとの関連も同時に示されてい

*1 高山純氏は、『奇跡の海洋民』(産報デラックス99の謎、1978年、サンボウジャーナル)の「大海原の民族大移動ー起点は遙か1万年以前か」で、この移住経路を「中国東南岸」と「インドネシア東部」からの2つをルートで地図上で図示している。

なお、『オセアニア海の人類大移動ー』(国立民族博物館編集、2007年9月)では、「中国東南部」のみを出発としている。そして「中国→台湾→フィリピン→太平洋の島々」というルートが地図上に図示されている。

*2 次の書物を参考にした。

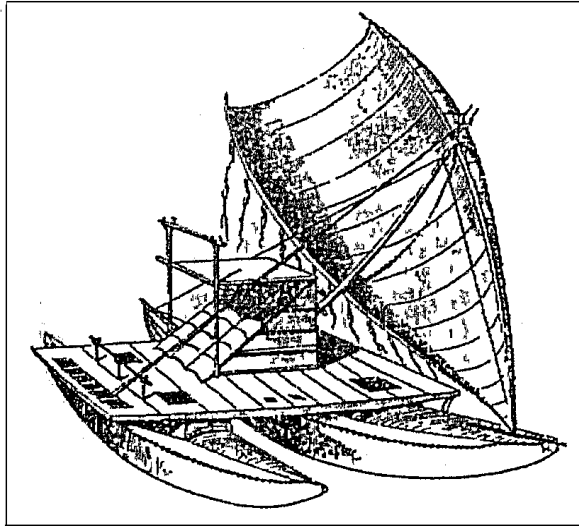
・後藤明著『海を渡ったモンゴロイドー太平洋と日本への道ー』(2003年3月、講談社。)
・片山一著『ポリネシア人ー石器時代の遠洋航海者たち』(1991年11月、同胞舎出版)

*3 前田良一著『縄文人はるかなる旅路』(2007年7月、日本経済新聞出版社。)364頁から転記

の航海を可能とした。

篠藤博士がタヒチ近辺の島の遺跡から発掘したカヌーの部品は、1000年以上前のもので、復元すると推定25mもの大型ダブル・カヌーであった。

図6 フィジーのダブル・カヌー*1



7-3 タッキング航法と往復航海

ラピタ人が拡散した海域では、その潮流のほとんど東から西へと流れており、また風も同じ方向に吹いていることが多かった。ところがラピタ人は、つぎつぎと東方へ拡散して行ったのである。ラピタ人は、潮の流れや風に逆らって航海する技術、即ちタッキング航法（ジグザグ航法ともいう。）を持っていた。

そればかりか風の向きや潮の流れ、星の位置などを利用して、再び出発地点へ戻る航海技術も持っていた。

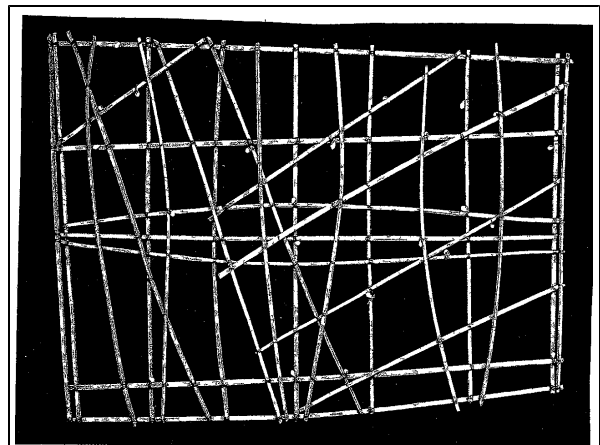
この仕組みこそが未知の島を開拓する秘訣だったと思われる。何故ならば往路に潮や風に逆らって航海すれば、たとえ新しい島を発見できなくても、帰路は順風や海流にのり、容易に出発地点に戻れることを意味をしているからである。

7-4 海図

この時代、遠洋航海に欠かせない羅針盤はなかった。ラピタ人・ポリネシア人は、星・風向き・潮流等を海域ごとに詳細に記録・記憶し、これを「ウタ」にして頭にたたき込み、羅針盤かわりにした。

また原始的ながら、竹と貝で海図を作成し、「ウタ」と「海図」をペアにして活用したのである。

図7 海図（19世紀頃、マーシャル諸島）*2



貝の位置が島を示している。

彼らはヤミクモに大海に乗り出したわけではなかった。丸木舟を手漕ぎの櫂で操船する等の幻想とは、この際キッパリと手を切るべきであろう。

8 偶然航海か、計画航海か？

彼らの遠洋航海の動機・理由・目的を探る議論は、かつては活発に行われた。現在では大方の意見を次のように集約できる。

「ラピタ人・ポリネシア人の遠洋航海の大部分は、未知の島への植民を目指した計画航海、即ち周到な準備によって計画された、積極的な移住航海であった。」と。

その理由とするものは、

*1 片山一道著『ポリネシア人—石器時代の遠洋航海者たち』（1991年11月、同胞舎出版）210頁から転記。

*2 「大英博物館の至宝展」図録（2003年10月、東京都美術館）より

この海図（竹、繊維、貝。100.0×約70.0）は「レベリブ」と呼ばれる種類であり、マーシャル諸島の広い海域を示している。通常、このような海図は経験豊かな航海者が記憶の補助として使い、正確な縮尺で作ったわけではない。

1890年から93年にかけて英国の艦艇ロイヤリストの巡航の途中で海軍大将H・M・デーヴィス収集したものである。現在でも土産品として販売するためにもっと単純な海図の制作が続いている。

なお、その他に『オセニアー海の人類大移動-』（64頁）に掲載されているのマーシャル諸島の海図（同館収蔵）がある。

① 彼らの航海能力は、(ハード、ソフトの両面で) 通常予想されるものよりも、はるかに優れたものであったこと。

② 発掘調査の結果によると、多くの島では定住を始めた時から、イヌ・ブタ・ニワトリの「三種の家畜」、タロイモ・サトイモ等の根菜類を始め、生活・文化に関わる様々な要素が組み合わさって存在していたこと。

などがあげられている。

私自身は次のように考える。

「彼らの遠洋航海の大部分は、『往復航海』を意図した『計画航海』だったのではないか。」

と。

しかし時には、仲間割れや部族抗争による逃避行のような「帰るあてのない」航海とか、突風・シケなどのアクシデントによる漂流もあったと思われる。

ここにおけるキーワードは、「計画航海」と「往復航海」である。

これなくして日本列島と「裸国・黒齒国」との間の交通はなく、従って『後漢書』・『三国志』・『海賦』の記述

南界を極める。

其東南にあり、船行き一年にして至るべし。

南に徂き、東に極まる。

もなかったであろう。

9 その他

南方諸島と日本列島との間の古代船、古代航法による交流は、21世紀の現在も試みられている。

① 1975年沖縄国際海洋博覧会に「パラオ人」がカヌーに乗って訪れ、沖縄島民から熱烈歓迎を受けた。アウトリガー・カヌーは古代船そのもので、操船も伝統航法通りということで、新聞紙上を賑わした。

② いつの新聞記事であったか失念したが、サタワル島(パラオ島の隣島)の長老の発案により、同島民の乗った古代船が八丈島へ到着した、と報じられていた。長老は伝統航法が絶滅することを恐れたためらしい。古代船はアウトリガー・カヌーで古代伝統航法で来たようだ。

③ ダブル・カヌーは、復元船「ホクレア号」が有名である。2007年8月6日の朝日新聞では、日本人女性も乗って「伝統航法」により太平洋を一周したことが書かれている。

10 『淮南子』等の文献史料にあらわれたる「裸国・黒齒国」について

一 関口昌春氏論文に啓発されて一

関口氏によれば、裸国・黒齒国に関する中国の古代文献史料には、次のようにものがある。

文 献		裸国・黒齒国	
書物名	目 次	裸	黒 齒
山海経	大荒東経	—	黒齒の国
史記	南越尉陀伝	裸国	
淮南子	墜形訓	裸国の民	黒齒の民
	説林訓	裸国	—
	脩務訓	—	黒齒
戦国策	趙巻	裸国	黒齒
呂氏春秋	求人	裸国の処	黒齒の国
管子	小匡	—	黒齒(の国)

さらに、黒齒の習俗は、『呉都賦』、『史記』(趙世家)等にもあらわれている。

ただし、残念なことにこれらの文献史料はことごとく単に国名のみ書かれていたり、方角や距離のどちらかが(または両方)が欠けていたりして、その位置を特定するに足る情報が不足している。

従って、「魏志」倭人伝の「裸国・黒齒国」の地理上の位置を特定する史料にはなり得ないと、私は判断した。

(このことが、『後漢書』倭伝、海賦、魏志倭人伝の3史料のみで、その地理上の位置を求めた理由である。)

ならば、これらの文献史料は、役に立たないものなのだろうか。そんなことはないと思う。

私は、先に論証の過程で、「マライポリネシア語族」について析出した。その分布圏は、マタガスカル島からイースター島にいたる広大な領

域であり、また、彼らの航海手段であるアウトリガー・カヌーの分布と重なっていた。

『淮南子』等の文献史料に散見される「裸国の民、黒齒の民」は、ほとんどがマライポリネシア語族からその情報を得ていたのではないかと、私は考えている。

彼らは、海民として中国の東・南・西の各方面に姿をあらわれ、中国の文献史料に記録されたのであろう。従って、『淮南子』の「裸国の民・黒齒の民」と、「魏志」倭人伝の「裸国・黒齒国」とが同一の場所にあるとは限らない。むしろ別々の場所にあったのではないだろうか。

『淮南子』以下の文献の史料価値は、「裸国の民、黒齒の民」に関しては、以上に述べた通りである。

それ以上でもないし、それ以下でもないとは思っている。

おわりに

私が身の程知らずに、本稿執筆を思い立ったのは、古田武彦氏の次の文章に接したからでした。

その場合の到達地点は、小さな島などではなく、あくまで「巨大な陸地」つまり大陸である。

(朝日文庫本『邪馬台国』はなかった』、383頁)

ハワイを始め太平洋諸島には、マゼランの世界周航のはるか以前から人々が移住していました。だから、この「巨大な陸地」説にずっと疑問を感じていたのです。

「前提が変われば、結論が変わる。」といわれます。この古田氏の「前提」(「巨大な陸地」説)を取り除いたら「結論」はどう変わるか、これが本稿執筆の動機でした。

私の描いた「もう一つの『裸国・黒齒国』」像は、あまたある仮説の上に屋上を架すだけの徒労に終わっただけなのか、或いは主要な仮説たちの末席を汚すことが許されるのか。

会員諸兄姉氏一人一人に委ねられる。

我々はどこから来たのか、我々は何者なのか、我々はどこへ行くのか。

(コーギャンの代表作(1897年・油彩)の題名。
ボストン美術館所蔵)

参考文献

- 1 『モンゴロイドの地球』[2] 南太平洋との出会い、大塚柳太郎編、1995年6月、東京大学出版会
- 2 『オセニア・暮らしの考古学』、印東道子著、2002年11月、朝日新聞社。
- 3 『海のモンゴロイドーポリネシア人の祖先をもとめてー』、片山一道著、2002年4月、吉川弘文館。
- 4 『太平洋』、ピーター・ベルウッド著 植木武・服部研二訳、1989年7月、法政大学出版局。
- 5 『人類がたどってきた道ー文化の多様化の起源を探るー』 NHKブックス1028、海部陽介著、2005年4月、日本放送出版協会。
- 6 『ポリネシアー石器時代の遠洋航海者たちー』片山一道著、1911年11月、同朋舎出版。
- 7 『海を渡ったモンゴロイドー太平洋と日本への道ー』 講談社選書メチエ264、後藤明著、2003年3月、講談社。
- 8 『モンゴロイドの道』朝日選書523、『科学朝日』選、1995年3月、朝日新聞社。
- 9 『オセニアー海の人類大移動ー』国立民族博物館編、責任編集：印東道子・飯沼卓、2007年9月、昭和堂。
- 10 『世界の名著』59、責任編集：泉靖一、マリノスキー著「西太平洋の遠洋航海者」(1922年)、1967年7月、中央公論社。
- 11 『女の民族誌2 (欧米・中東・オセニア編)』、綾部恒雄編、安井真奈美著「パラオの女性ー母系社会の習慣を生きる」、1996年10月、弘文堂。
- 12 『母系社会の構造ーサンゴ礁の島々の民族誌ー』、藤謙一著、1989年8月、紀伊国屋書店。
- 13 『台湾の民族と文化』、宮本延人他著、1987年12月、六興出版。

前号に引き続いて、林伸禧氏の「古代逸年号資料」を掲載します。

- 1 はじめに
- 2 古代逸年号の採集
- 3 古代逸年号採集の参考書物
- 4 古代逸年号資料
 - (1) 『群書類従』編
 - (2) 『全国神社名鑑』編
 - (3) 『全国寺院名鑑』編
 - (4) 『全日本仏教全書』編
 - (5) 『山岳宗教史研究叢書』編

古代逸年号資料(6)

瀬戸市 林 伸禧

4 古代逸年号資料

(6) 『神道大系(神社編)』編

逸年号採集状況は、別表7-1(編纂順)・別表7-2(逸年号順)のとおりである。

『神道大系』*1は、全国各地の神社の縁起・行事等の史料及び神道に関する論説等をまとめたもので、『神道大系』127巻、同目録1巻、『続神道大系』50巻、同目録1巻の計179巻からなる。

今回は、神社編(正・続57巻、なお、伊勢神宮関係史料は神宮編として編纂されている。)に掲載してあった逸年号を収集した。

なお、今回は逸年号が掲載されていない冊子でも、神社編全体を示すため冊子の表題を掲載した。

逸年号に関して留意すべき事項があり、その状況は次のとおりである。

表 『防長寺社由来』に於ける琳聖太子来朝記事一覧

頁数	文献名	記 事
3	氷上山由緒書	推古天皇十七年己巳有大星、在周防国都濃郡鷲頭庄青柳浦松樹之上、……、時神託巫人曰、異邦之太子将来朝、故北辰下臨以鎮護之云々、……、 <small>(推古十九)</small> 居三年 辛未歳 百济国琳聖太子来朝、
552	医王寺縁起覚	然処ニ推古天子十七年防州都濃郡鷲頭庄青柳ノ浦、……、巫人ニ託云、吾ハ是北辰妙現也、今ヨリ三年ヲ経テ百济国ノ聖王日本ニ来朝ス、其ノ聖王ヲ留テ王法ヲ修行シ国家ヲ治ムヘシ、…… 時三年ヲ期定居元年辛未琳聖太子来朝ス、
7	鷲頭寺古記	多々良氏譜牒曰 推古天皇御宇十七年己巳周防国都濃郡鷲頭庄青柳浦有大星、……、時託巫人曰、異国太子来降于日本、爲其擁護 北辰下降云々、……、 経三年辛未歳百济国齐明王第三皇子琳聖太子来朝、

*1 この大系は、神道に関する古典を網羅したものであるが、その内容は神道のみならず、国文学・国史学までの広い領域にわたる基本的な典籍を網羅した一大叢書であって、収録された内容は奈良時代の『古事記』・『日本書紀』から江戸時代の注釈書や伴信友などの著作や、さらには僧侶の両部神道の論説に至るまで、実に広範な関連分野におよんでいる。

まさに江戸時代に塙保己一(はなわほきいち)が編纂した『群書類従』にも比較できる全集である。

(名古屋女子大学図書館報『図書館だより』36号、岡田精司著「神道大系」抜粋)

神道大系は、全体を次の八部門に分けている。 ※ ()内の数字は正・続を併せた巻数

首編(8)、古典編(13)、古典注釈編(8)、朝儀祭祀編(21)、神宮編(5)、神社編(57)、

論説編(53)、文学編(5)、目録(2)

なお、神社編の編集は、主要とされた神社は1巻(頁数が少ない場合は合冊している。)とし、それ以外の神社は、旧国別で編纂している。但し、北海道・沖縄地方については現都道府県名で編纂している。

- 1 年号についての原文及び傍注を検討したところ、注釈すべき事項があったので、その内容を別表7の付表として記載した。そして、校訂すべき年号等は掲載逸年号覧を校訂した。
- 2 神社編39「安芸・周防・長門国」165頁『氷上山由緒書』（『防長寺社由来』第3巻、『氷上山由緒書』の所引き）の「居三年辛未歳」は、「定居三年辛未」で年号と思われたが、『防長寺社由来』には『氷上山由緒書』と同様な記事がある（表『防長寺社由来』に於ける琳聖太子来朝記事一覧参照）。これらの記事を比較検討すると、関係文「居三年辛未歳百済国琳聖太子来朝」は「三年たつて、辛未年に百済国琳聖太子が来朝した。」と解釈すべき思われたので、年号ではないとした。

ひろば

松本清張と古田武彦

知多郡阿久比町 竹内 強

2009年11月25日、NHK教育テレビ「知る楽・松本清張」を観た。詩人で作家の辻井喬氏（元西部デパート社長の堤清二）が清張の再評価について論評した。その中で、1963年に中央公論社が文学全集に松本清張の作品を入れて出版しようとしたとき、三島由紀夫が反対して結局全集には松本作品が入らなかったエピソードを紹介していた。純文学の世界の中では清張は孤立、いや枠外に置かれていたようである。

古代史学界の中での古田武彦氏の置かれている位置と酷似していると感じたのは私だけではないと思う。その清張氏について古田氏は『なかったー真実の歴史学ー』第1号～6号（「敵祭ー松本清張さんへの書簡」）でその出会いから松本氏の古代史論議について論評しています。特に第5号では、清張氏が司会をされた朝日新聞社主催の「耶馬台国シンポジウム」での古田氏に対する古代史学界の態度は文学界の清張氏に対する態度とあまりにも似ているのです。

わたしにとっては、古代史に興味を持つきっかけを作ってくれた松本清張氏と生涯の師と仰ぐ古田武彦氏との関係を知る上で興味深い書であった。

それにしてもお二人が、純文学の世界、古代史学界から必ず再評価される日がやってくる日がことを心から願うとともに、その日が近いことを確信するものです。

11月例会報告

○ 文献による「大宝」年号以前の逸年号群の類型区分について

瀬戸市 林 伸禧

古代逸年号（大宝以前の年号）を文献から採集しているが、逸年号は次のように3類型に分類することが判明したので報告した。

- 1 I型：日本書紀型
 - ・孝徳紀：大化、白雉
 - ・天武紀：朱鳥
- 2 II型：皇代記類型
 - ・孝徳紀：大化、白雉
 - ・天武紀：朱雀、白鳳、朱鳥
 - ・持統紀：朱鳥、大化、
 - ・文武紀：大化
- 3 III型：二中歴類型
 - ・継体紀～持統紀：継体始め32年号（含「聖徳」）

なお、古代逸年号の原形論として、次の2説が唱えられている。

・丸山晋司説

『二中歴』の年号群の内、「仁王12年」を「仁王6年、聖徳6年」とし、「継体、朱鳥」を除き、「大化」の次に「大長9年」を加えた年号群で、「大宝」に続くとした。

・古賀達也説

『二中歴』の「大化6年」を「9年」とし、「大長9年」を加えて元明紀まで続くとした。すなわち、「大宝・慶雲・和銅」年号と並列するとした。なお、「聖徳」年号実在の有無については保留としている。

○ 太宰府の創建と基山

知多郡阿久比町 竹内 強

もし、太宰府が「周礼」考工記に基づく王都であれば、それ自体が単なる大和朝廷の出先機関ではあり得ない。王都とはそれ自体が天命によって与えられた地上の儀礼の場としての舞台なのである。太宰府が単なる地方出先機関ではなく、『日本書紀』が書いているように「白村江の戦い」以後整備された、という定説が崩れることになるのではないだろうか。

そしてそれは、「日出所の天子『多利思北孤』の都」九州王朝の王都であることの証明ではないだろうか。

太宰府の中心領域がこれまで考えられていた政庁跡ではなく扇屋敷（王城神社）付近だとすれば経度が4秒のずれを示す8キロ離れた基山が南の基点である。基山こそが太宰府建設の基礎となった山でありその名前はここからきたのではないか。

基山の名称についての歴史的考察を見てみよう。

- ① 景行天皇が高良山から当地方を見て、霧に覆われていたので「霧の国」と呼んだことにちなむ（『肥前風土記』）
- ② 「松津」を「杵肆」の誤りとする杵山説（旧事本紀・国造本紀）
- ③ 五十猛命の植樹の故事による木山説
- ④ 基山が肥前の国の鬼門の位置にあるからという説

どれをとっても納得できる答えはない。

ところで新たな疑問が生まれた。それは、基山の南東500メートルにある2つの小水城（関屋土塁、とうれぎ土塁）が、太宰府、基山の方向にむけての防御体制でつくられ、有明海側からの攻撃には守れないことである。このことは太宰府条坊、大野城、大水城、基肆城、そして小水城などの造設時期がいつなのかもう一度考察する必要があるのではないだろうか。

以上のことを述べた。

○ 『日本書紀』（継体紀～持統紀）に於ける「初・始」について

瀬戸市 林 伸禧

前回に引き続いて、『日本書紀』における「始」の解釈について、日本古典文学大系『日本書紀』での読下し文を一部検討した。

その結果、より適切な読下しがあると判明した。

12月例会に参加を

日時：12月13日（日）午後1時30分～5時
場所：名古屋市市政資料館（第1集会室）

Tel:052-953-0051

名古屋市東区白壁1丁目3番地

参加料：500円（会員無料）

交通機関

- ・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- ・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分
- ・ 「清水口」下車、南西徒歩8分
- ・ 「市役所」下車、東へ徒歩8分

駐車場

- ・名古屋市市政資料館：12台収容（無料）
- ・ウィルあいち（愛知県女性総合センター）地下駐車場：南隣、有料（30分170円）
- ・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料（40分200円）

今後の予定

1月例会：1月17日（日）名古屋市市政資料館
2月例会：2月21日（日）名古屋市市政資料館
例会は、1・2月とも**第3日曜日**です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配布される場合は、「**20部**」ご用意願います。

例会出席者へお願い

例会に出席される方は、「東海の古代」最新号を持参されるようお願いいたします。

『二中歴』では「定居三年癸酉（元年：辛未）」
ある。かつ、

容を別表 7 - 1 の付表 1（『神道大系』（神社編）
注釈）及び付表 2（厳島神社縁起に記載されてい
る古代逸年号）で掲載した。そして、校訂すべ
き年号等は登載逸年号覧を訂正した。